

校異源氏物語・すま

世中いとわつらはしくはしたなきことのみまされはせめてしらすかほにありへてもこれよりまさることもやおほしなりぬかのすまはむかしこそ人のすみかなともありけれいまはいとさとはなれ心すくくてあまのいゑたにまれになときゝ給へと人しけくひたゝけたらむすまゐはいとほいなるへしさとてみやこをとをさからもふるさとおほつかなかるへきを人わるくそおほしみたるゝよろつのときしかたゆくすゑおもひつゝけ給にかなしきこといとさまゝなりうきものと思ひすてつる世もいまはとすみはなれなん事をおほすにはいとすてかたきことおほかるなかにもひめ君のあけくれにそへてはおもひなけき給へるさまの心くるしうあはれなるをゆきめぐりても又あひみむ事をかならすとおほさむにてたになを一二日のほとよそゝにあかしくらすおりゝたにおほつかなきものにおほえ女君も心ほそうのみおもひ給へるをいくとせそのほとゝかきりあるみちにもあらずあふをかきりにへたゝりゆかんもさためなき世にやかてわかるへきかとてにもやといみしうおほへ給へはしのひてもろともにもやおほしよるおりあれとさる心ほそからんうみつらのなみ風よりほかにたちましる人もなからんにかくらうたき御さまにてひきくし給へらむもいとつきなくわか心にも中ゝ物おもひのつまなるへきをなとおほしかへすを女君はいみしからむみちにもをくれきこえすたにあらはとおもむけてうらめしけにおほいたりかの花ちるさにもおほしかよふことこそまれなれ心ほそくあはれなる御ありさまをこの御かけにかくれてものし給へはおほしなけきたるさまもいとことほりなりなをさりにてもほのかにみたてまつりかよひ給し所ゝ人しれぬ心をくたき給人そおほかりける入道の宮よりもゝのゝきこえや又いかゝとりなさむとわか御ためつゝましかれとしのひつゝ御とふらひつねにありむかしかやうにあひおほしあはれをもみせたまはましかはとうちおもひいて給にもさもさまゝに心をみつくすへかりける人の御ちきりかなとつらく思きこえ給三月はつかあまりのほとになむみやこをはなれ給ひける人にいつとしもしらせ給はすたゝいとちかうつかうまつりなれたるかきり七八人はかり御ともにいていかすかにいてたちたまふさるへき所ゝに御ふみはかりうちしのひ給ひしにもあはれとし

のはるはかりつくい給へるは見所もありぬへかりしかとそのおりの心ちのまき
れにはかゝしうもきゝをかすなりにけり二三日かねてよにかくれておほいと
のにわたり給へりあんしろくるまのうちやつれたるにて女くるまのやうにてか
くろへいり給もいとあはれにゆめとのみゝゆ御方いとさひしけにうちあれたる
心ちしてわか君の御めのとゝもむかしさふらひし人のなかにまかてちらぬかき
りかくわたり給へるをめつらしかりきこえてまうのほりつとひてみたてまつる
につけてもことにものふかゝらぬわかき人ゝさへよのつねなさおもひしられ
て涙にくれたりわか君はいとうつくしうてされはしりおはしたりひさしきほと
にわすれぬこそあはれなれとてひさにすゑたまへる御けしきしのひかたけなり
おとゝこなたにわたり給ひてたいめし給へりつれゝにこもらせ給へらむほと
なにと侍らぬむかしものかたりもまいりてきこえさせむとおもふ給へれと身の
やまひをもきによりおほやけにもつかうまつらすくらゐをもかへしたてまつり
て侍にわたくしさまにはこしのへてなむとものゝきこえひかゝしかるへきを
いまは世中はかるへき身にも侍らねといちはやきよのいとおそろしう侍なりか
ゝる御事をみたまふにつけていのちなかきは心うくおもふ給えらるゝよのすゑ
にも侍かなあめのしたをさかさまになしてもおもふたまへよらさりし御ありさ
まをみたまふればよろついとあちきなくなんときこえ給ひていたうしほたれ給
とあることもかゝる事もさきのよのむくひにこそ侍なれはいひもてゆけはたゝ
身つからのをこたりになむ侍さしてかく官尺をとられすあさはかなることにか
ゝつらひてたにおほやけのかしこまりなる人のうつしさまにて世中にありふる
はとかおもきわさに人のくにゝもし侍なるをとくはなちつかはすへきさため
なども侍るなるはさまことなるつみにあたるへきにこそ侍るなれにこりなき心
にまかせてつれなくすくし侍らむもいとほゝかりおほくこれよりおほきなるは
ちにのそまぬさきに世をのかれなむとおもふ給へたちぬるなとこまやかにきこ
え給むかしの御ものかたり院の御事おほしのたまはせし御心はへなときこえい
て給て御なをしのそてもえひきはなちたまはぬに君もえ心つよくもてなし給は
すわかきみのなに心なくまきれありきてこれかれになれきこえ給をいみしとお
ほいたりすき侍にし人を世におもふ給へわするゝよなくのみいまにかなしひ侍
をこの御事になむもし侍世ならましかはいかやうにおもひなけき侍らましく
そみしかくてかゝるゆめをみすなりにけると思給なくさめ侍おさなくものし給
うかかくよはひすきぬる中にとまり給てなつさひきこえぬ月日やへたゝり給は
むと思たまふるをなむよろつのことよりもかなしう侍いにしへの人もまことに

おかしあるにてしもかゝる事にあたさりけり猶さるへきにて人のみかとも
かゝるたくひおほう侍りけりされといひいつるふしありてこそさることも侍け
れとさまかうさまに思給へよらむかたなくなむなどおほくの御ものかたりきこ
え給三位中将もまいりあひ給ておほみきなとまいり給ふに夜ふけぬれはとまり
給て人々御まへにさふらはせ給てものかたりなとせさせ給人よりはこよなう
しのひおほす中納言の君いへはえにかなしうおもへるさまを人しれすあはれと
おほす人みなしつまりぬるにとりわきてかたらひ給これによりとまり給へるな
るへしあけぬれは夜ふかういて給ふにありあけの月いとおかし花の木ともやう
くさかりすきてわつかなるこかけのいとしろきにはうすくきりわたりたる
そこはかとなくかすみあひて秋の夜のあはれにおほくたちまされりすみのかう
らむにをしかゝりてとはかりななめ給中納言の君みたてまつりをくらむとにや
つまとをしあけてゐたり又たいめむあらむことこそおもへはいとカタけれかゝ
りけるよをしらて心やすくもありぬへかりし月ころさしもいそかてへたてしよ
などのたまへはものもきこえすなくわか君の御めのとの宰相の君して宮のおま
へより御せうそこきこえ給へり身つからきこえまほしきをかきくらすみたり心
ちためらひ侍ほとにいとよふかういてさせ給なるもさまかはりたる心ちのみし
侍かな心くるしき人のいきたなきほとはしはしもやすらはせ給はてときこえ給
へれはうちなきたまひて

とりへ山もえしけふりもまかふやとあまのしほやくうらみにそゆく御返と

もなくうちすし給てあか月のわかれはかうのみや心つくしなる思しり給へる人
もあらむかしとの給へはいつとなくわかれといふもしこそうたて侍るなるなか
にもけさは猶たくひあるましうおもふ給へらるゝほとかなとはなこゑにてけに
あさからすおもへりきこえさせまほしきことも返くおもふたまへなからたゝに
むすほゝれ侍ほとをしはからせ給へいきたなき人はみたまへむにつけても中
くうきよのかれかたうおもふ給へられぬへければ心つよう思給へなしていそ
きまかて侍ときこえ給いて給ふほとを人々のそきてみたてまつるいりかたの
月いとあかきにとゝなまめかしうきよらにてものおほいたるさまとらおほ
かみたになきぬへしませていはけなくおはせしほとよりみたてまつりそめてし
人々なれはたとしへなき御ありさまをいみしとおもふまことや御返

なき人のわかれやいとゝへたゝらむけふりとなりし雲井ならてはとりそへ
てあはれのみつきせすいて給ひぬるなこりゆゝしきまてなきあへりとのにおは
したればわか御方の人々もまとろまさりけるけしきにて所々にむれゐてあ

さましとのみ世をおもへるけしきなりさふらひにはしたしうつかまつるかきりは御ともにまいるへき心まうけしてわたくしのわかれおしむほどにや人もなしさらぬ人はとふらひまいるをもきとかめありわつらはしきことまされは所せくつとひしむまくるまのかたもなくさひしきに世はうきものなりけりとおほししるる大はむなどもかたへはちりはみてたゝみ所くひきかへしたりみるほとたにかゝりましていかにあれゆかんとおほすにしのたいにわたり給へれば御かうしもまいらてなかめあかしたまひければすのこなとにわかきはらはへところくゝにふしていまそおきさはくとのゑすかたともおかしうているをみたまふにも心ほそうとし月へはかゝる人人もえしもありはてゝやゆきちらむなとさしもあるましきことさへ御めのみとまりけりよはしかくして夜ふけにしかはなんれいのおもはすなるさまにやおほしなしつるかくて侍ほとたに御めかれすとおもふをかくよをはなるゝきはには心くるしきことのをつからおほかりけるひたやこもりにてやはつねなき世に人にもなさけなきものと心をかれはてんといとおしうてなむときこえ給へはかゝるよをみるよりほかにおもはすなることはなに事にかとはかりのたまひていみしとおほしいれたるさま人よりことなるをことほりそかしちゝみこいとおろかにもとよりおほしつきにけるにましてよのきこえをわつらはしかりてをとつれきこえ給はす御とふらひにたにわたり給はぬを人のみるらむこともはつかしく中くしられたてまつらてやみなましをまゝはゝのきたの方などのにわかなりしさいはひのあわたゝしさあなゆゝしやおもふ人方くゝにつけてわかれ給ふ人かなとのたまひけるをさるたよりありてもりきゝ給ふにもいみしう心うければこれよりもたえてをとつれきこえ給はす又たのもしき人もなくけにそあはれなる御ありさまなる猶よにゆるされかたうてとし月をへはいはほのなかにもむかへたてまつらむたゝいまは人きゝのいとしきなかるへきなりおほやけにかしこまりきこゆる人はあきらかなる月日のかけをたにみすやすらかにみをふるまふこともいとつみをかなりあやまちなけれとさるへきにこそかゝることもあらめと思にましておもふ人くするはれいなきことなるをひたおもむきにものくるをしき世にてたちまさることもありなんときこえしらせ給日たくるまておほとこのこもれり帥宮三位中将などおはしたりたいめし給はむとて御なをしなとたてまつるくらゐなき人はとてむもんのなをし中くゝいとなつかしきをき給てうちやつれ給へるいとめてたし御ひんかき給とてきやうたいにより給へるにおもやせ給へるかけの我なからいとあてにきよらなればこよなうこそおとろへにけれこのかけのやうにやゝせて侍あはれな

るわきかなとの給へは女君なみたひとめうけてみをこせ給へるいとしのひかたし

身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬか、みのかけは、なれしとき

こえ給へは

わかれてもかけたにとまるものならはか、みをみてもなくさめてまはし
らかくれにゐかくれて涙をまきはし給へるさま猶こ、らみるなかにたくひな
かりけりとおほし、らる、人の御ありさまなりみこはあはれなる御ものかた
きこえ給てくる、ほとにかへり給ひぬはなちるさとの心ほそけにおほしてつね
にきこえ給もことはりにてかの人もいまひとたひみすはつらしとおもはんと
おほせはその夜は又いて給ふものからいともうくていたうふかしておはした
れは女御かくかすまへ給てたちよらせ給へること、よろこひきこえ給さまき
つ、けむもうるさしいといみしう心ほそき御ありさま、御かけにかくれてす
くいたまへるとし月いと、あれまさらむほとおほしやられてとの、うちいとか
すかなり月おほろにさしいて、池ひろく山こふかきわたり心ほそけにみゆるに
もすみはなれたらむいはほのなかおほしやらるにしおもてはかうしもわたり給
はすやとうちくしておほしけるにあはれそへたる月かけのなまめかしうしめや
かなるにうちふるまひ給へるにほひにるものなくていとしのひやかにいり給へ
はすこしゐさりいて、やかて月をみておはすまたこ、に御物かたりのほどにあ
けかたちかうなりにけりみしかよのほとやかはかりのたいめむも又はえしもや
とおもふこそことなしにてすくしつるとしころもくやしうきしかたゆくさきの
ためしになるへき身にてなにとなく心のとまる世なくこそありけれとすきにし
かたのこと、もの給ひてとりもしはく、なけは世につ、みていそきいて給れい
の月のいりはつるほとよそへられてあはれなり女君のこき御そにうつりてけに
ぬる、かほなれは

月かけのやとれるそてはせはくともとめてもみはやあかぬひかりをいみし
とおほいたるか心くるしければかつはなくさめきこえたまふ

ゆきめくりつるにすむへき月かけのしはしくもらむそらな、かめそおもへ
ははかなしやた、しらぬ涙のみこそ心をくらすものなれなどのたまひてあけく
れのほどにいて給ひぬよろつの事ともした、めさせ給したしうつかまつり世に
なひかぬかきりの人くとの、事とりをこなふへきかみしもさためをかせ給ふ
御ともにしたひきこゆるかきりは又えりいて給へりかの山さとの御すみかのく
はえさらすとりつかひたまふへきものともことさらよそひもなくことそきてさ

るへきふみとも文集なといりたるはこさては琴ひとつそもたせ給ところせき御てうとはなやかなる御よそひなとさらにくし給はすあやしの山かつめきてもてなし給さふらふ人くよりはしめよろつのことみなにしのたいにきこえわたし給りやうし給みさうみまきよりはしめてさるへき所く券なとみなたてまつりをき給ふそれよりほかのみくらまちおさめとのなといふ事まで少納言をはかくしきものにみをき給へはしたしきけいしともくしてしろしめすへきさまどもの給ひあつくわか御方の中つかさ中將などやうの人くつれなき御もてなしなからみたてまつるほどこそなくさめつれなに事につけてかとおもへとも命ありてこの世に又かへるやうもあらむをまちつけむとおもはむ人はこなたにさふらへとのたまひてかみしもみなまうのほらせ給わか君の御めのとたち花ちるさなどもおかしきさまのはさるものにてまめくしきすちにおほしやらぬことなし内侍のかみの御もとにわりなくしてきこえ給とはせたまはぬもことはりに思ひ給へなからいまはと世をおもひはつるほどのうさもつらさもたくひなきことにこそ侍けれ

あふせなきなみたの河にしつみしやなかるゝみおのはしめなりけむと思給いつるのみなむつみのかれかたう侍ける道のほともあやうければこまかにはきこえ給はす女いといみしうおほえ給てしのひ給へと御そてよりあまるもところせうなん

なみたかはうかふみなはもきえぬへしなかれてのちのせをもまたすてなく

くみたれかき給へる御ていとおかしけなりいまひとたひたいめなくてやとおほすは猶くちおしけれとおほしかへしてうしとおほしなすゆかりおほうておほろけならすしのひ給へはいとあなちにもきこえ給はすなりぬあすとてくれには院の御はかおかみたてまつり給とてきた山へまうて給あか月かけて月いつる比なれはまつ入道宮にまうて給ちかきみすのまへにおましまいりて御身つからきこえさせ給東宮の御事をいみしうしろめたきものに思きこえ給かたみに心ふかきとちの御ものかたりはよろつあはれまさりけんかしなつかしうめてたき御けはひのむかしにかはらぬにつらかりし御心はへもかすめきこえさせまほしけれといまさらにうたてとおほさるへし我御心にもなかくいまひときはみたれまさりぬへければねむしかへしてたゝかく思ひかけぬつみにあたり侍もおもふ給へあはすることのひとふしになむそもおそろしう侍おしけなき身はなきになしても宮の御世にたにことなくおはしまさはとのみきこえ給そこはりなるや宮もみなおほししるゝことにしあれば御心のみうこきてきこえやり給は

す大将よろつの事かきあつめおほしつゝ、けてなき給へるけしきいつきせすな
まめきたり御山にまいり侍を御ことつてやときこえ給にとみにものもきこえ給
はすはりなくためらひたまふ御けしきなり

みしはなくあるはかなしきよのはてをそむきしかひもなく／＼そふるいみ
しき御心まとひともおほしあつむる事ともゝえそつゝ、けさせ給はぬ

わかれしにかなしき事はつきにしをまたその世のうさはまされる月まち

いてゝ、いて給ふ御ともにたゝ五六人はかりしも人もむつまじきかきりして御む
まにてそおはするさらなる事なれとありし世の御ありきにことなりみないとか
なしう思なりなかにかのみそきのひかりのみすいしんにてつかうまつりし右近
のそののくら人うへきかうふりもほとすきつるをつゐにみふたけつられつかさ
もとられてはしたなければ御ともにまいるうちなりかものしものみやしろをか
れとみはたすほとふとおもひいてられておりて御むまのくちをとる

ひきつれてあふひかさしゝ、そのかみをおもへはつらしかものみつかきとい
ふをけにいかにおもふらむ人よりけにはなやかなりしものをとおほすも心くる
し君も御むまよりおり給てみやしろのかたおかみ給神にまかり申し給ふ

うき世をはいまそわかるゝとゝ、まらむ名をはたゝすの神にまかせてとのた
まふさまものめてするわかき人にて身にしみてあはれにめてたしとみたてまつ
る御やまにまうて給ておはしましゝ、御ありさまたゝめのまへのやうにおほしい
てらるかきりなきにても世になくなりぬる人そいはむかたなくゝちおしきわさ
なりけるよろつのことをなく／＼申給ひてもそのことはりをあらはにうけ給は
りたまはねはさはかりおほしのたまはせしさま／＼の御ゆいこんはいつちかき
えうせにけんといふかひなし御はかはみちの草しけくなりてわけいり給ほとい
とゝ、つゆけきに月もかくれてもりのこたちこふかく心すこしかへりいてんかた
もなき心しておかみ給にありし御をもかけさやかにみえ給へるそゝろさむきほ
となり

なきかけやいかゝ、みるらむよそへつゝ、なかむる月も雲かくれぬるあけはつ
るほどにかへり給ひて春宮にも御せうそこきこえ給わう命婦を御かはりにてさ
ふらはせ給へはその御つほねにとてけふなんみやこはなれ侍又まいりはへらす
なりぬるなんあまたのうれへにまさりておもふ給へられ侍よろつをしはかりて
けいしたまへ

いつかまたはるのみやこのはなをみんなときうしなへる山かつにしてさくら
のちりすきたるえたにつけ給へりかくなむと御らんせさすれはおさなき御心ち

にもまめたちておはします御返いかゝものし給らむとけいすれはしはしみぬたに恋しきものをとくはましていかにといへかしのたまはすものはかなの御返やとあはれにみたてまつるあしきなきことに御心をくたき給ひしむかしのことおり／＼の御ありさま思つゝけらるゝにもものおもひなくて我も人もすくいたまひつへかりけるよを心とおほしなけけるをくやしうわか心ひとつにかゝらむことのやうにそおほゆる御返はさらにきこえさせやり侍らすおまへにはけいし侍ぬ心ほそけにおほしめしたる御けしきもいみしくなむとそこはかどなく心のみたれけるなるへし

さきてとくちるはうけれとゆく春は花のみやこをたちかへりみよときしあ

らはときこえてなこりもあはれなるものかたりをしつゝひと宮のうちのひてなきあへりひとめもみたてまつれる人はかくおほしくつをれぬる御ありさまをなけきおしみきこえぬ人なしましてつねにまいりなれたりしはしりをよひ給ましきおさめみかはやうとまでありかたき御かへりみのしたなりつるをしはしにてもみたてまつらぬほとやへむとおもひなけきけりおほかたの世の人もたれかはよろしく思ひきこえんなゝつになり給しこのかみゝかとおまへによるひるさふらひ給てそうし給事のならぬはなかりしかはこの御いたはりにかゝらぬ人なく御とくをよろこはぬやありしやむことなきかむたちめ弁官などの中にもおほかりそれよりしもはかすしらぬを思ひしらぬにはあらねとさしあたりていちはやきよを思はゝかりてまいりよるもなしよゆすりておしみきこえしたにおほやけをそしりうらみたてまつれと身をすてゝとふらひまいらむにもなにのかひかはとおもふにやかゝるおりは人わろくうらめしき人おほく世中はあちきなきものかなとのみよろつにつけておほすその日は女君に御ものかたりのとかにきこえくらし給てれいのよふかくいて給かりの御そなどたひの御よそひいたくやつし給て月いてにけりなゝをすこしいてゝみたにをくりたまへかしいかにきこゆへき事おほくつもりにけりとおほえむとすらんひとひふつかたまさかにへたゝるおりたにあやしういふせき心ちするものとてみすまきあけてはしにいさなひきこえ給へは女君なきしつみたまへるをためらひてゐさりいて給へる月影にいみしうおかしけにてゐたまへりわか身かくてはかなきよをわかれなはいかなるさまにさすらへたまはむとうしろめたくなしけれとおほしいりたるにいとゝしかるへければ

いけるよのわかれをしらてちきりつゝ命を人にかきりけるかなはかなしなとあさはかにきこえなし給へは

おしからぬいのちにかへてめのまへのわかれをしはしと、めてしかなけに
さそおほさるらむといとみすてかたけれとあけはてなは、したなかるへきによ
りいそきて給ぬ道すからおもかけにつとそひてむねもふたかりながら御ふね
にのり給ひぬ日なきころなれはおひかせさへそひてまたさるの時はかりにか
のうらにつき給ぬかりそめのみちにてもかゝるたひをならひ給はぬ心ちに心ほ
そさもおかしさもめつらかなりおほえとのといひける所はいたうあれて松はか
りそしるしなる

からくに、名をのこしける人よりもゆくゑしらぬいへるをやせむなきさ
によるなみのかつかへるをみ給てうらやましくもとうちすしたまへるさまさる
よのふる事なれとめつらしうき、なされかなしとのみ御ともの人／＼おもへり
うちかへりみたまへるにこしかたの山はかすみはるかにてまことに三千里のほ
かの心ちするにかいのしつくもたへかたし

ふるさとをみねのかすみはへたつれとなかむるそらはおなし雲井かつらか
らぬものなくなむおはすへき所はゆきひらの中納言のもしほたれつ、わひける
いへるちかきわたりなりけりうみつらはやゝいりてあはれにすけなる山中な
りかきのさまよりはしめてめつらかにみ給かやゝともあしふけるらうめくやな
とおかしうしつらひなしたり所につけたる御すまひやうかはりてかゝらぬおり
ならはおかしうもありなましとむかしの御心のすさひおほしいつちかき所／＼
のみさうのつかさめしてさるへきことゝもなとよしきよのあそんしたしきけい
しにておほせをこなふもあはれなり時のまにいと見所ありてしなさせ給水ふか
うやりなしうへきともなとしていまはとしつまり給ふ心ちうつゝならすくにの
かみもしたしきとの人なれはしのひて心よせつかうまつるかゝるたひ所ともな
う人さはかしけれともはか／＼しうものをものたまひあはすへき人しなけれは
しらぬくにの心ちしていとむもれいたくいかてとし月をすくさましとおほしや
らるやう／＼ことしつまりゆくになかあめのころになりて京の事もおほしやら
るゝにこいしき人おほく女君のおほしたりしさま春宮の御事わか君のなに心も
なくまきたまひしなどをはしめこゝかしこ思ひやりきこえたまふ京へ人いた
したて給ふ二条院へたてまつり給と入道の宮のとはかきもやり給はすくらされ
給へり宮には

松しまのあまのとまやもいかならむすまのうら人しほたるゝころいつと侍

らぬなかにもきしかたゆくさきかきくらしみきはまさりてなん内侍のかみの御
もとにれいの中納言の君のわたくしことのやうにて中なるにつれ／＼とすきに

しかたの思給へいてらるゝにつけても

こりすまのうらのみるめのゆかしきをしほやくあまやいかゝおもはんさま

くゝかきつくし給ことのは思ひやるへし大殿にも宰相のめのもとにつかうまつ
るへき事とかきつかはす京にはこの御ふみ所くゝにみ給ひつゝ御心みたれた
まふ人くゝのみおほかり二条院の君はそのまゝにおきもあかり給はすつきせぬ
さまにおほしこかるればさふらふ人くゝもこしらへわひつゝ心ほそうおもひあ
へりもてならし給し御てうとゝもひきならし給ひし御ことぬきすて給つる御そ
のにほひなどにつけてもいまはと世になからむ人のやうにのみおほしたればか
つはゆゝしうて少納言はそうつに御いのりの事なときこゆふたかたにみすほう
なとせさせ給かつはおほしなけく御心しつめ給ひて思ひなきよにあらせたてま
つり給へと心くるしきまゝにいのり申給たひの御とのゐものなとてうしてたて
ぬかゝみとのたまひしおもかけのけに身にそひたまへるもかひなしいていり給
ひしかたよりゐたまひしまきはしらなとをみたまふにもむねのみふたかりても
のをとかう思ひめくらしよにしほしめぬるよはひの人たにありましてなれむつ
ひきこえちゝはゝにもなりておほしたてならはし給へればこひしう思ひきこえ
給へることはりなりひたすら世になくなりなむはいはむかたなくてやうくわ
すれくさもおひやすらんきくほとはちかけれといつまでとかきりある御わかれ
にもあらておほすにつきせすなむ入道宮にも春宮の御事によりおほしなけくさ
まいとさらなり御すくせのほとをおほすにはいかゝあさくおほされんところ
はたゝものゝきこえなどのつゝましさにすこしなさけあるけしきみせはそれに
つけて人のとかめいつる事もこそとのみひとへにおほしゝのひつゝあはれをも
おほう御らむしすくしすくしうもてなし給ひしをかかりうきよの人こと
なれとかけてもこのかたにはいひいつることなくてやみぬるはかりの人の御を
もむけもあなかなりし心のひくかたにまかせすかつはめやすくもてかくしつ
るそかしあはれにこひしうもいかゝおほしいてさらむ御返もすこしまやかに
てこのころはいとゝ

しほたるゝことをやくにてまつしまにとしふるあまもなけきをそつむかむ

の君の御返には

浦にたくあまたにつゝむこひなれはくゆるけふりよゆくかたそなきさらな

る事とはえなむとはかりいさゝかかきて中納言の君のなかにありおほしなけ
くさまなといみしういひたりあはれと思ひきこえ給ふしゝもあれはうちなか

れ給ひぬひめ君の御ふみはこゝろことにこまかなりし御返なればあはれなることとおほくて

浦人のしほくむそてにくらへみよなみ路へたつるよるのころをものゝい

ろしたまへるさまなといときよらなりなにともらうゝしうものし給ふをおもふさまにていまはことゝに心あはたゝしうゆきかゝつらふかたもなくしめやかにてあるへきものとおほすにいみしうくおしうよるひるおもかけにおほえてたへかたう思ひいてられ給へはなをしのひてやむかへましとおほす又うちかへしなそやかうき世につみをたにうしなはむとおほせはやかて御さうしんにてあけくれをこなひておはす大とのゝわか君の御事などあるにもいとかなしけれとをのつからあひみてんたのもしき人ゝものし給へはうしろめたうはあらずとおほしなさるゝは中ゝこの道のまとはれぬにやあらむまことやさはかしかりしほどのまきれにもらしてけりかの伊勢の宮へも御つかひありけりかれよりもふりはへたつねまいれりあさからぬことゝもかき給へりことのはふてつかひなとは人よりことになまめかしくいたりふかうみえたり猶うつゝとはおもひたまへられぬ御すまゐをうけ給はるもあけぬ夜の心まとひかとなんざりともとし月へたてたまはしとおもひやりきこえさするにもつみふかき身のみこそ又きこえさせむこともはるかなるへけれ

うきめかるいせをのあまを思ひやれもしほたるてふすまのうらにてよろつ

におもひたまへみたるゝよのありさまもなをいかなりはつへきにかとおほかり

いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけりものを

あはれとおほしけるまゝにうちをきゝかき給へるしろきからのかみ四五まいはかりをまきつゝけてすみつきなどみ所ありあはれに思ひきこえし人をひとふしうしとおもひきこえし心あやまりにかのみやす所も思うしてわかれ給ひにしておほせはいまにいとおしうかたしけなきものに思ひきこえ給おりからの御ふみいとあはれなれは御つかひさへむつましうて二三日すゑさせ給てかしこのものかたりなとせさせてきこしめすわかやかにけしきあるさふらひの人なりけりかくあはれなる御すまひなれはかやうの人もをのつからものとからてほのみたてまつる御さまかたちをいみしうめてたしとなみたおとしをりけり御返かき給ことのはおもひやるへしかく世をはなるへき身と思ひたまへましかはおなしくはしたひきこえましものをなとなむつれゝと心ほそきまゝに

伊勢人の浪のうへこくをふねにもうきめはからてのらましものを

あまかつむなけきのなかにしほたれていつまてすまのうらになかめむきこ

えさせむ事のいつとも侍らぬこそつきせぬ心地し侍れなどそありけるかやうに
いつこにもおほつかなからすきこえかはし給花ちるさともかなしとおほしける
まゝにかきあつめ給へる御心くみ給ふおかしきもめなれぬ心地していづれも
うちみつゝなくさめ給へとものおもひのもよほしくさなめり

あれまさるのきのしのふをなかめつゝしけくも露のかゝる袖かなとあるを

けにむくらよりほかのうしろみもなきさまにておはすらんとおほしやりてなか
あめについち所くくつれてなむときゝ給へは京のけいしのもとにおほせつか
はしてちかきくにくのみさうのものなともよをさせてつかうまつるへきよし
のたまはすかむの君は人わらへにいみしうおほしくつをるゝをおとゝいとか
しうし給きみにてせちに宮にも内にもそうし給ければかきりある女御みやす所
にもおはせすおほやけさまの宮つかへとおほしなおり又かのにくかりしゆへこ
そいかめしきこともいてこしかゆるされ給ひてまいり給ふへきにつけても猶心
にしみにしかたそあわれにおほえたまける七月になりてまいり給いみしかりし
御おもひのなこりなれは人のそしりもしろしめされすれいのうへにつとさふら
はせ給てよろつにうらみかつはあはれにちきらせ給御さまかたちもいとなまめ
かしうきよらなれと思ひいつることのみおほかる心のうちそかたしけなき御あ
そひのついてにその人のなきこそいとさうしけれいかにましてさおもふ人
おほからむなに事もひかりなき心ちするかなとのたまはせて院のおほしのたま
はせし御心をたかへつるかなつみうらむかしとて涙くませ給にえねむしたまは
す世中こそあるにつけてもあちきなきものなりけれとおもひしるまゝにひさし
くよにあらむものとなむさらにおもはぬさもなりなむにいかゝおほさるへきち
かきほどのわかれにおもひおとされんこそねたけれいける世にとはけによから
ぬ人のいひをきけむといとなつかしき御さまにてものをまことにあはれとおほ
しいりてのたまはするにつけてほろくゝとこほれいつれはさりやいつれにおつ
るにかとのたまはすいまゝてみこたちのなきこそさうくしけれ東宮を院のゝ
たまはせしさまにおもへとよからぬ事ともいてくめれは心くるしうなとよを御
心のほかにまつりこちなし給人くのあるにわかき御心のつよき所なきほとに
ていとおしとおほしたることもおほかりすまにはいとゝ心つくしの秋風にうみ
はすこしとをけれとゆきひらの中納言のせきふきこゆるといひけんうらなみよ
るくはけにいとちかくきこえてまたなくあわれなるものはかゝる所の秋なり
けり御前にいと人すくなにてうちやすみわたれるにひとりめをさましてまくら

をそはたてゝよものあらしをきゝ給になみたゝこゝもとにたちくる心ちして涙
おつともおほえぬに枕うくはかりになりにけり琴をすこしかきならし給へるか
我なからいとすこきこゆれはひきさし給て

恋わひてなくねにまかふうらなみはおもふかたより風やふくらんとうたひ
給へるに人ゝおとろきてめてたうおほゆるにしのはれてあいなうおきあつゝ
はなをしのひやかにかみわたすけにいかにおもふらむわか身ひとつによりおや
はらからかた時たちはなれかくほとにつけつゝおもふらむ家をわかれてかく
まとひあへるとおほすにいみしくていとかく思ひしつむさまを心ほそしとおも
ふらむとおほせはひるはなにくれとうちの給まきはしつれゝなるまゝにい
ろゝのかみをつきつゝてならひをしたまひめつらしきさまなるからのあやな
とにさまゝのゑともをかきすさひ給へる屏風のおもてともなといとめてたく
見所あり人ゝのかたりきこえしうみやまのありさまをはるかにおほしやりし
を御めにちかくてはけにをよはぬいそのたゝすまひになくかきあつめ給へりこ
のころの上手にすめる千枝つねのりなとをめしてつくりゑつかうまつらせはや
と心もとなかりあへりなつかしうめてたき御さまに世のもの思ひわすれてちか
うなれつかうまつるをうれしきことにて四五人はかりそつとさふらひけるせむ
さいの花色ゝさきみたれおもしろきゆふくれにうみゝやらるゝらうにいて給
てたゝすみ給ふさまのゆゝしうきよらなる事所からはましてこの世のものとみ
え給はすしろきあやのなよゝかなるしをんいろなとたてまつりてこまやかなる
御なをしておひしとけなくうちみたれ給へる御さまにて釈迦牟尼仏弟子となのり
てゆるゝかによみ給へるまた世にしらすきこゆおきよりふねとものうたひのゝ
しりてこきゆくなともきこゆほのかにたゝちひさきとりのうかへるとみやらる
ゝも心ほそけなるにかりのつらねてなく声かちのをとにまかへるをうちなかめ
給ひて涙こぼるゝをかきはらひたまへる御てつきくろき御すゝにはえ給へるふ
るさとの女こひしき人ゝ心みなゝくさみにけり
はつかりはこひしき人のつらなれやたひのそらとふこゑのかなしきとの給
へはよしきよ

かきつらねむかしのことそおもほゆるかりはそのよの友ならねとも民部大
輔

こゝろからとこよをすてゝなくかりをくものよそにもおもひけるかなさき
の右近のそう

とこよいてゝたひのそらなるかりかねもつらにをくれぬほとそなくさむと

もまとはしてはいかに侍らましといふおやのひたちになりてくたりしにもさそはれてまいれるなりけりしたにはおもひくたくへかめれとほこりかにもてなしてつれなきさまにしありく月のいとはなやかにさしいてたるにこよひは十五夜なりけりとおほしいて、殿上の御あそひこひしく所／＼なかめ給らむかしと思ひやり給ふにつけても月のかほのみまもられ給ふ二千里外故人心とすし給へるれの涙もと、められす入道の宮のきりやへたつるとのたまはせしほといはむかたなく恋しくおり／＼の事おもひいて給ふによ、となかれ給ふよふけ侍ぬときこゆれとなをいり給はす

みるほどそしはしなくさむめぐりあはん月のみやこは、るかなれともその

ようへのいとなつかしうむかしものかたりなとしたまひし御さまの院に、たてまつり給へりしも恋しく思いてきこえ給ひて恩賜の御衣はいまこゝにありとすしつゝ、いり給ひぬ御そはまことに身をはなたすかたはらにをき給へり

うしとのみひとへにもものはおもほえてひたりみきにもぬる、袖かなそのこ

ろ大式はのほりけるいかめしくいひろくむすめかちにて所せかりければきたのかたはふねにてのほるうらつたひにせうようしつゝくるにほかよりもおもしろきわたりなれは心とまるに大将かくておはすときけはあいなうすいたるわきむすめたちは舟のうちさへはつかしう心けさうせらるまして五節の君はつなてひきするもくちおしきに琴のこゑかせにつきてはるかにきこゆるに所のさま人の御ほともの、ねの心ほそさとりあつめ心あるかきりみな、きにけりそち御せうそこきこえたりいとはるかなるほとよりまかりのほりてはまついつしかさふらひてみやこの御ものかたりもところおもひ給へ侍りつれ思のほかにかくておはしましける御やとをまかりすき侍かたしけなうかなしうも侍かなあひしりて侍人／＼さるへきこれかれまてきむかひてあまた侍れは所せさを思ひ給へは、かり侍ことゝも侍りてえさふらはぬこととさらにまいり侍らむなときこえたりこのちくせむのかみそまいれるこの殿のくら人になしかへりみたまひし人なれはいともかなしいみしとおもへともまたみる人／＼のあれはきこえをおもひてしはしもえたちとまらすみやこはなれてのち昔したしかりし人／＼あひみる事かたうのみなりにたるにかくわさとたちよりものしたることゝの給ふ御返もさやうになむかみなく／＼かへりておはする御ありさまかたるそちよりはしめむかへの人／＼まか／＼しうなきみちたり五節はとかくしてきこえたりことのねにひきとめらるゝつなてなはたゆたふ心君しるらめやすき／＼しさも人なとかめそときこえたりほをゑみてみ給いとはつかしけなり

こゝろありてひきてのつなのたゆたはゝうちすきましやすまのうら浪いさ

りせむとはおもはさりしはやとありむまやのおさにくしとらする人もありける
をましておちとまりぬへくなむおほえけるみやこには月日するまゝにみかと
をはしめたてまつりてこひきこゆるおりふしおほかり春宮はましてつねにおほ
しいてつゝしのひてなき給ふみたてまつる御めのとまして命婦の君はいみしう
あはれにみたてまつる入道の宮は春宮の御事をゆゝしうのみおほしゝに大将も
かくさすらへたまひぬるをいみしうおほしなかる御はらからの御こたちむつ
ましうきこえ給ひしかむたちめなどはしめつかたはとふらひきこえ給などあり
きあはれなるふみをつくりかはしそれにつけても世中にのみめてられ給へはき
さいの宮きこしめしていみしうの給ひけりおほやけのかうしなる人は心にまか
せてこの世のあちはひをたにしる事かたうこそあなれおもしろきいへるして世
中をそしりもときてかのしかをむまといひけむ人のひかめるやうについせうす
るなどあしきことゝもきこえければわつらはしとてせうそこきこえ給ふ人なし
二条院のひめ君はほとふるまゝにおほしなくさむおりなしひんかしのたいにさ
ふらひし人ゝもみなわたりまいりしはしめはなとかさしもあらむとおもひし
かとみたてまつりなるゝまゝになつかしうおかしき御ありさまゝめやかなる御
心はへも思ひやりふかうあはれなれはまかてちるもなしなへてならぬきはの人
ゝにはほのみえなし給ふそこらの中にすくれたる御心さしもことはりなり
けりとみたてまつるかの御すまゐにはひさしくなるまゝにえねむしすくすまし
うおほえ給へとわか身たにあさましきすくせとおほゆるすまゐにいかてかはう
ちくしてはつきなからむさまをおもひかへし給ふ所につけてよろつの事さまか
はりみ給へしらぬしも人のうへをもみ給ひならはぬ御心地にめさましようかたし
けなうみつからおほさる煙のいとちかく時ゝたちくるをこれやあまのしほや
くならむとおほしわたるはおはしますうしろの山にしはといふものふすふるな
りけりめつらかにて

山かつのいほりにたけるしはゝもことゝひこなんこふるさと人冬になり

て雪ふりあれたるころそらのけしきもことにすくなかめ給て琴をひきすさひ
給ひてよしきよにうたうたはせ大輔よこふえふきてあそひ給心とゝめてあはれ
なるてなとひきたまへるにことものゝこゑともはやめてなみたをのこひあへり
むかし胡のくにゝつかはしけむ女をおほしやりてましていかなりけんこの世に
わか思きこゆる人などをさやうにはなちやりたらむことなどおもふもあらむこ
とのやうにゆゆしうて霜のゝちの夢とすし給ふ月いとあかうさしいりてはかな

きたひのおまし所おくまてくまなしゆかのうへに夜ふかきそらもみゆいりかた
の月かけすこくみゆるにたゝこれにしにゆくなりとひとりこちたまで

いつかたの雲路に我もまよひなむ月のみるらむこともはつかしとひとりこ

ち給てれいのまどろまれぬあか月のそらに千とりいとあはれになく

ともちとりもろこゑになくあか月はひとりねさめのどこもたのもし又おき

たる人もなければ返々ひとりこちてふし給へりよふかく御てうつまいり御ねん
すなとし給ふもめつらしき事のやうにめてたうのみおほえ給へはえみたてまつ
りすてす家にあからさまにもえいてさりけりあかしのうらはたゝはひわたるほ
となればよしきよの朝臣かの入道のむすめを思ひいてゝふみなどやりけれと返
事もせずちゝ入道そきこゆへき事なむあからさまにたいめんもかなといひけれ
とうけひかさらむものゆへゆきかゝりてむなしくかへらむうしろでもおこな
へしとくむしいたうていかす世にしらす心たかくおもへるにくにの内はかみの
ゆかりのみこそはかしき事にすめれとひかめる心はさらにさもおもはてとし
月をへけるにこの君かくておはすときゝてはゝきみにかたらふやうきりつほの
更衣の御はらの源氏のひかる君こそおほやけの御かしこまりにてすまのうらに
ものし給なれあこの御すくせにておほえぬことのあるなりいかてかゝるついて
にこの君にをたてまつらむといふはゝあなかたはや京の人のかたるをきけはや
むことなき御めともいとおほくもち給ひてそのあまりしのひくゝみかとの御め
さへあやまち給ひてかくもさはかれ給ふなる人はまさにかくあやしき山かつを
心とゝめ給てむやといふはらたちてえしりたまはしおもふ心となりさる心を
し給へついでしてこゝにもおはしまさせむと心をやりにいふもかたくなしくみ
ゆまはゆきましてつらひかしつきけりはゝ君なとかめてたくともゝのゝはしめ
につみにあたりてなかされておはしたらむ人をしも思ひかけむさてもこゝろを
とゝめ給ふへくはこそあらめたはふれにてもあるましきことなりといふをいと
いたくつふやくつみにあたる事はもろこしにもわかみかともかく世にすくれ
なに事も人にことになりぬる人のかならすある事なりいかにものし給君そこは
ゝみやす所はをのかをちにものし給ひし按察大納言のむすめなりいとかうさく
なるなをとりてみやつかへにいたしたまへりしにこくわうすくれてときめかし
給事ならひなかりけるほどに人のそねみをもくてうせ給にしかと此君のとまり
給へるいとめてたしかし女は心たかくつかふへきものなりをのれかゝるあ中人
なりとておほしすてしなといひゐたりこのむすめすくれたるかたちならねとな
つかしうあてはかに心はせあるさまなとそけにやむことなき人におとるましか

りける身のありさまをくちおしきものにおもひしりてたかき人は我をなにのかすにもおほさしほとにつけたる世をはさらにみしいのちなかくておもふ人くをくれなはあまにもなりなむうみのそこにも入なむなどと思ひけるちきみところせくおもひかしつきてとしにふた、ひすみよしにまうてさせけり神の御しるしをそひとしれすたのみおもひけるすまにはとしかへりて日なかくつれくくなるにうへしわか木のさくらほのかにさきそめて空のけしきうら、かなるによるつの事おほしいてられてうちなき給ふおりおほかり二月廿日あまりいにしとし京をわかれし時心くるしかりし人くの御ありさまなといと恋しく南殿のさくらさかりになりぬらんひと、せの花の宴に院の御けしきうちのうへのいときよらになまめいてわかつくれるくをすし給ひしもおもひいてきこえ給

いつとなく大宮人のこひしきにさくらかさし、けふもきにけりいとつれ

くくなるに大殿の三位中将はいまは宰相になりて人からのいとよければ時世のおほえをもくてもなし給へと世中あはれにあちきなくもの、おりことに恋しくおほえ給へはこのきこえありてつみにあたるともいか、はせむとおほしなしてにはかにまうて給ふうちみるよりめつらしう、れしきにもひとつなみたそこほれるすまひ給へるさまいはむかたなくからめいたり所のさまゑにかきたらむやうなるに竹あめるかきしわたしていしのはし松のはしらおろそかなるものからめつらかにおかし山かつめきてゆるしいろのきかちなるにあをにひのかりきぬさしぬきうちやつれてことさらにゑなかひもてなし給へるしもいみしうみるにゑまれてきよらなりとりつかひたまへるてもかりそめにしなしておまし所もあらはにみいれらるこすくろくはむてうとたきのくなどゑ中わさにしなしてねんすのくをこなひとつめ給けりとみえたりものまいれるなどことさら所につけ、うありてしなしたりあまともあさりしてかいつものもてまいれるをめしいて、御らむすうらにとしふるさまなど、はせ給にさまくやすけなきみのうれへを申すそこはかとなくさえつるも心のゆくゑはおなしことなにかことなるとあはれにみ給ふ御そともなとかつけさせ給ふをいけるかひありとおもへり御むまともちかうたて、みやりなるくらかなにそなるいねとりいて、かふなとめつらしうみ給ふあすかひすこしうたひてつきころの御ものかたりなきみわらひみわか君のなにともよをおほさてもなし給かなしさをとおと、のあけくれにつけておほしなけくなとかたり給にたへかたくおほしたりつきすへくもあらねはなかく、かたはしもえまねはすよすからまとろますふみつくりあかし給さいひなからもものきこえをつ、みていそきかへり給いと中くなり御かはらけ

まいりてゑいのかなしひ涙そゝく春のさかつきのうちともろこゑにすし給御ともの人も涙をなかくすをのかしゝはつかなるわかれおしむへかめりあさほらけのそらに雁つれてわたるあるしのきみ

ふるさとをいつれのはるかゆきてみんうらやましきはかへるかりかね宰相

さらに立いてん心ちせて

あかなくにかりのとこよをたちわかれ花のみやこにみちやまとはむさるへ

きみやこのつとなどよしあるさまにてありあるしの君かくかたしけなき御をくりにとてくろこまたてまつり給ゆゝしうおほされぬへけれと風にあたりてはいはへぬへければなむと申給ふ世にありかたけなる御むまのさまなりかたみにしのひ給へとていみしきふえの名ありけるなとはかり人とかめつへき事はかたみにえしたまはす日やうゝさしあかりてこゝろあはたゝしければかへりみのみしつゝいて給をみくり給ふけしきいとなかゝなりいつ又たいめむはと申給にあるし

雲ちかくとひかふたつもそらにみよ我はゝる日のくもりなき身そかつはたのまれなからなくなりぬる人むかしのかしこき人たにはかゝしう世に又ましらふ事かたく侍ければなにかみやこのさかひを又みんとなむ思侍らぬなどの給ふ宰相

たつかなき雲井にひとりねをそなくつはさならへしとを恋つゝかたしけなくなれきこえ侍ていとしもとくやしう思給へらるゝおりおほくなとしめやかにもあらてかへり給ひぬるなこりいとゝかなしうなかめくらし給やよひのついたりにてきたるみの日けふなむかくおほすことある人はみそきしたまふへきとなまさかしき人のきこゆれはうみつらもゆかしうていて給いとおろそかにせしやう許をひきめくらししてこのくにゝかよひける陰陽師めしてはらへせさせ給ふふねにことゝしき人形のせてなかくすをみ給ふによそへられて

しらさりしおほうみのほらになかれきてひとかたにやはものはかなしきと

てゐ給へる御さまさるはれにいてゝいふよしなくみえ給ふうみのおもてうら

ゝゝとなきわたりてゆくゑもしらぬにこしかたゆくさきおほしつゝけられて

やをよろつ神もあはれとおもふらむをさせるつみのそれとなければとの給

にはかに風ふきいてゝそらもかきくれぬ御はらへもしはてすたちさはきたりひちかさあめとかふりきていとあはたゝしければみなかへり給はむとするにかさもとりあへずさる心もなきによろつふきちらし又なき風なりなみいとかめしうたちて人ゝのあしをそらなりうみのおもてはふすまをはりたらむやうに

ひかりみちて神なりひらめくおちかゝる心ちしてからうしてたとりきてかゝる
めはみすもあるかな風などはふくもけしきつきてこそあれあさましうめつらか
なりとまとふに猶やますなりみちてあめのあしあたる所とおりぬへくはらめき
おつかくてよはつきぬるにやと心ほそく思まとふに君はのとやかに経うちすし
ておはすくれぬれは神すこしなりやみて風そよるもふくおほくたてつる願のち
からなるへしいまはしかくあらはなみにひかれていりぬへかりけりたかしほ
といふものになむとりあへす人そこなはるゝとはきけといとかゝる事はまたし
らすといひあへりあか月かたみなうちやすみたりきみもいさゝかねいり給へれ
はそのさまともみえぬ人きてなと宮よりめしあるにはまいり給はぬとてたとり
ありくとみるにおとろきてさはうみのなかの竜王のいというものめてするも
のにてみいれたるなりけりとおほすにいとものむつかしうこのすまるたへかた
くおほしなりぬ